哀悼　　熊崎壮介さん・岩波健児さん
―ありがとう、安らかに―

諏訪湖でのボートの普及と発展に貢献した二人のビッグネーム・熊崎壮介さん（下諏訪町）と岩波健児さん（岡谷市）が相次いで逝去されました。ボートを愛好する私たち仲間の願いもむなしく、皆に惜しまれての本当に早い旅立ちでした。今後の活躍が期待されていただけに、残念でなりません。享年、熊崎さん６４歳、岩波さん５８歳。

お二人とも下諏訪町職員として才能を惜しみなく発揮するとともに、情熱を傾けたボートの普及に携わり、長野県ボート協会での職務や下諏訪町漕艇協会理事として活躍。率先垂範する姿は多くのオアズパーソンの目標ともなっていた偉大な存在でした。謙虚な素晴らしい人間性も魅力の一つでした。

生前の厚誼に深く感謝し、ここに哀悼の誠を捧げます。安らかにお眠りください。

熊崎壮介さんプロフィール

岡谷南高校、法政大学卒。1978年（昭和53）7月、下諏訪町役場入庁
2020年（令和2年）4月27日逝去（享年64）
下諏訪レガッタ＝1982（S.57）5.31、下諏訪町民レガッタ打合せ会に下諏訪町職員として参画／競漕会役員（審判艇乗務員や総務委員）で尽力／選手としては初期のころ、コックスとして出場／秋田県本荘市（現由利本荘市）とのボート交流＝町教委体育係として本荘市の担当者と頻繁に電話でやり取りし、中身の濃い交流となる。ただ、東北弁でことばが良くわからない時もあり、「間違えないためにも念のためFAXをお願いします」と相手に話したことを本人が笑いながら話してくれたエピソードも／町漕艇協会＝理事（総務部員）を務める／10周年記念事業実行委員（総務部長）、30周年記念事業実行委員（総務・記録部会副部会長）を担当する。

岩波健児さんプロフィール

岡谷南高校漕艇部・インターハイや国体のナックルフォアで2位／中央大学ボート部・全日本選手権シングルスカルで優勝／1979年（昭和54年）下諏訪町役場入庁／1980年（昭和55年）モスクワオリンピックのダブルスカルで日本代表に選ばれる（政治的背景により集団ボイコットで参加できず）／2015年（平成27年）3月26日逝去（享年58）
下諏訪レガッタ＝1982（S.57）5.31、下諏訪町民レガッタ打合せ会に町体育係として参画／大会役員（総務）や競漕会役員（配艇委員、総務委員）で尽力／選手としてエキスパート部門に出場全国市町村交流レガッタ＝2012年の第21回豊岡大会へ成年女子「チーム岩健」監督として参加し、優勝。
この大会で下諏訪町が2年連続の女子総合優勝に貢献／町漕艇協会＝理事（事務局次長）を務める／下諏訪レガッタ30周年記念事業実行委員（会計）を担当する。

岩波健児君、熊崎壮介君二人を偲んで

元長野県ボート協会理事長
元長野県ボート協会副会長　中島　伸一

私と岩波君との出会いは、昭和48年千葉県小見川国体でした。彼のボートに向かう姿勢は、長野県にあって最も尊敬するオアズマンであり、その早世は惜しまれてなりません。

逝去された前年の7月19日、入院されていた国立がんセンター中央病院（東京都中央区築地）に電話を入れて「今日はモスクワオリンピックの開会式の日だよ」と伝えると「そうでしたか頑張らなくちゃあ」と答えてくれ、私の携帯電話にメールで「モスクワの開会式の日でしたか、涙腺が緩んでしまいます、久々にお声を聞かせて頂いて俄然力が湧きました。本当にありがとうございます」と送ってくれました。

第41回「かいじ国体」（1986年）シングルスカルで優勝

日本ボート協会の普及部長、故磯さんは「オリンピックで貸し出したシングルスカルは返さなくて長野県で使っていいよ」と岩波君に贈ってくれたのでした。

あの時代をシングルスカルで生きた岩波君の尊い姿は今でも脳裏から離れません。「長野の岩波」として多くの人々から愛され、親しまれ、長野県ボートの顔として全国に知られることになったのでした。

地元にあっては、競技力の向上・普及に努めてくれ、下諏訪レガッタでは指導者としてその育成に尽力された事が今日の長野県ボートの隆盛につながっているのです。

愛知県の鎧塚一さん銅像建立式典参加

選手として先頭に立って、昼休みにエルゴメーターの音を下諏訪体育館に響かせていたことを思い起こしつつ・・・・・。

熊崎君はボートを愛し、人と人との関係を繋いでくれた人でした。
彼から電話で3月26日にごく内輪で故岩波健児君の3回忌の集いを行いたいので協力してくれないかとの連絡があり、小人数（こにんずう）でお父さんをお呼びして行いたいとの事でしたので賛成し、開催し続けることができましたのも彼の御蔭です。

熊崎君とは、私が理事長時代、国体開催地で何かと要件があると、自費で応援に来ている彼が快く手伝ってくれ助けてもらいましたし、会場では出漕スケジュールに従い必ず長野県選手の出場するレースを応援し、選手たちを励ましてくれていました。国体に参加してくれた回数ではボート仲間では一番であったと思います。

又愛知の鎧塚一氏を中心に設立された全国ボート場所在市町村首長会議にも協力し、事務局会議等にも出席され多くの友人・知人との交流を行い、御柱祭には下諏訪での交流を開催するなど各方面で活躍されました。平成２７年４月にあった鎧塚さんの功績を称えた銅像建立除幕式典にも私と二人で参加してその遺徳を偲びました。

多くのボートでの交流を大切にし、その面倒見の良さは熊崎君の人柄の示すところであると思います。長いお付き合いにあらためて感謝申し上げます。

『ボートを漕ぐことは、ひとつの芸術だ。この世界で最も優れた芸術であり、動きはシンフォニーだ。すばらしく漕げば、完璧にちかづき、そして完璧に近づけば、神の領域にふれる。自分の中の自分に、つまりは自分の魂にふれる。』　（オリンピックに挑んだ若者たちーより引用）

惜しんでも余りある岩波健児君、熊崎壮介君のご冥福をお祈りいたします。

岩波君・熊崎君を偲んで

前下諏訪町長　　青木　悟

この原稿の依頼がきたとき、下諏訪ローイングパーク「AQUA未来」ではイタリアとアルゼンチンのオリンピック選手たちが練習に励んでいました。

2011年初夏、視察先の山梨県河口湖畔で

２０１４年１１月、新橋にある病院で闘病生活を送る岩波君を見舞ったとき、窓から見える海の森ボートコースの方向を眺めながら「オリンピック楽しみですね、見に行きたいですね」と会話したことを思い出す。最期までボートが大好きな少年の様な眼差しで。

熊崎君、岩波君との出会いは岡谷南高校時代、１年後輩の熊崎君は部室が隣のバレー部員。三年生の私は「強くなるには兎に角大きいやつを入部させよう」の思いで新入生の岩波君に声を掛けました。その後三年生になった岩波君らは見事インターハイ、国体準優勝に輝きました。岩波君は中央大学に進学し輝かしい成績を残し、幻とはなりましたがモスクワ五輪の選手として選ばれました。

そんな二人が下諏訪町役場に奉職し、町役場ボート部員となり、今の下諏訪レガッタ発展の基礎を作ってくれることになるのです。

昭和５７年に始まった「町民レガッタ」。熊崎君は役場ボート部の皆さんの協力を得ながら参加クルーを集め、私は当時まだ各地区で活動していた青年会を中心に参加をお願いして回りました。無事に第１回大会が終了したときには、我が飛翔会クルーの優勝とも相まって感動と感激は今も忘れることはできません。

その後も熊崎君は下諏訪町漕艇協会事務局として長年レガッタを支え、毎朝５時前には艇庫のシャッタを開け、新たに参加してくれるクルーメンバーの指導にあたり、岩波君も熱心に取り組んでくれました。当時、まだまだ大会の運営の人員確保が大変ななか、役場職員の皆さんがボランティアで力を発揮してくれました、それも熊崎君の大きな功績です。

第24回下諏訪レガッタで

当時まだ現役の国体選手として活躍していた岩波選手、その応援のため必ず大会に出向き、レース前若干緊張している岩波君に言葉を掛け支えていた熊崎君。二人の熱い友情もまた後世に語り継ぎたい事実です。

「町民レガッタ」として始まったこの大会も「下諏訪レガッタ」と名称も変わり40周年を迎えるまでに発展してまいりました。参加クルーも諏訪圏域はもとより県内外からのクルーも増え、まさに「ボートのまち下諏訪」を全国に発信しています。何より現在大会を支えてくれている運営スタッフの殆どは、この下諏訪レガッタが育んできたボートが大好きな皆さんです。これこそが全国に誇れる姿だと思います。

この様な形になることを信じ努力を重ねてくれた熊崎君そして岩波君。きっとお二人も喜んで空の上から見守ってくれていることと思います。今はただ、お二人のご冥福を皆さんと共にお祈りしたいと思います。

追　悼　文

長野県ボート協会副理事長
下諏訪町漕艇協会副会長　　小口　正志

性格なのか、はたまた体質なのか、古から今日に至るまでいろんなことに興味があっても長続きせずの自分が、何故かボートとの係わりは気付けば40年の歳月を超えてしまっています。

我ながら不思議の感もありますが、私に影響を与えて戴いた多くの先駆者に超えられずとも近づきたいとの強い思いがそうさせているのかも知れません。

私の心の底には、残念ながら今は亡き岩波健児さんと熊崎壮介さんの存在は消え去ることなくど真ん中に存在しています。

今から12年前、ボートをやってみたいから教えてほしいと申し出てきたミセスたち。聞けば勝つ喜びを知りたいとかで、リクエストにお応えすべく程なく始まった部活動擬き。結果、キャリア半年での加古川全国レガッタで準優勝。翌年の城崎では優勝をしてしまいました。

城崎の帰りのSAで岩波さんが「どうしたらそんなに強くできるのか。指導方法を教えてほしい」と真顔で私に言ってきたのが衝撃でした。私如きがオリンピアンに教えるなどと滅相もないのは当然ながら、偉ぶらず自然のアクセントで言ってきたのは、プライドという名の壁など持ち合わせてはいないという証なのでしょうか。なんの違和感もなく、町漕の会計を長らく務めて戴いたのも代表的なひとつと思えてなりません。

第20回全国市町村交流レガッタ豊岡大会で優勝した東弥生町あきちゃんズ

なんの大会だったか、諏訪湖での大会を序盤のみNHKで全国生放送したとき、第一レースで発艇員を務めた私がアップで放送されたようです。スタート直後、発艇台の携帯が鳴り築地の17階の岩波さんから「俺がスタート位置にいるようで、正志のアテンションに緊張した。格好良かったぜ」との言葉。目指してもなり切れない格好いいとの岩波さんの言葉に自惚れ、その時の映像を未だにFacebookのプロフィール写真としています。

下諏訪レガッタでは、ほぼひとりで発艇をやるようになった頃、必ず熊ちゃんは部署に待機してくれました。きっと体調も優れないだろうに私のサポートを熱心にしてくれました。どんなに遠い場所でも、国体、全国レガッタに自力で訪れ、楽しそうに観戦していた姿は忘れられません。一緒によく飲みました。本当によく飲みました。気骨稜稜の熊ちゃんからは、ボート以外にも計り知れない程の人生を享受された思いです。

酔って錬成の家の階段数全てを上からバウンドしてきた熊ちゃん。一緒に飲みに行くと、決まって翌日「俺の自転車知らないか？」と電話を寄越した岩波さん。

いつの日か必ず一升瓶持参で伺います。
大好きなボート談義でときを忘れましょうね！

なによりボート、そして仲間

下諏訪町漕艇協会総務部長　　両角　久美

旅が好きで、お酒が好きで、趣味も幅広く話をしていて楽しい。決してでしゃばることなく、でもその場をまとめてくれる。ボートやレガッタの事を聞けば何でも答えてくれる、いないと寂しい、いるだけで安心できる。そんな熊崎壮介さんが亡くなられて１年が過ぎました。
今の諏訪湖でのボート競技と漕艇場が、賑やかに誰でも親しめる環境にあることは、当たり前ではなく、熊崎さんのご功労があってこそと思っています。

旅好きの熊ちゃん、出張先の宇治市の宇治平等院前で

全国市町村交流レガッタ大会で日本各地へ行くと、東北でも関西でも、ひょっこりと熊崎さんが現れました。「ちょうどこの近くに来たくてね。ここのお酒が美味しいんだよ。ここの協会の○○さんに会いたくてね。」と話す笑顔の熊崎さんがいました。老若男女を問わず、日本中どこへ行っても「熊チャン」と呼ばれていることが何よりも彼の人となりを表しています。ご自身も競技をされていた経験から、下諏訪レガッタに参加された皆さんの中にも、熊崎さんのアドバイスで救われた人は多いはずです。
「ボートを通じて交流を深めること」にこだわった熊崎さんの思いを、私達は忘れません。ご冥福をお祈りいたします。

岩波健児君の手（高校時代の思い出）

長野県ボート協会審判部長
下諏訪町漕艇協会審判部長　　伊東　敏隆

岡谷南高校に入学した昭和４７年４月。時が矢のように過ぎ毎日が緊張感に満ちあふれていた入学間もない頃、漕艇部に私と共に彼は入部しました。

岡南漕艇部時代。高3の夏、佐賀インターハイの宿舎前で

あの頃の事を思い出そうとすると、いつも彼の大きな手が目に浮かんできます。手の甲はいつも日に焼けていて、掌は異様に黄味がかり、武骨で指も比較的太くて少し節くれだった感じでした。何故かその手が印象強く記憶にあるのは、本格的に乗艇練習をした当初、木製のスイープオールに慣れず掌の皮膚が剥け、ヨーチンを塗っては漕いでいた印象が強いからです。
彼はご存じの通り、当初から運動能力、体力ともに抜群で一目置かれた存在でしたが、きつい練習でもいつもにこやかにRowingを楽しんでいました。レースにおいて勝つこと以上に力尽きる最後まで漕ぎきって「ローアウト」することに喜びを感じていたようでした。その精神はクルーとしてもステップアップしていく中で反映され、インターハイなど大きな大会での好戦績につながりました。
高3の冬、大学受験準備で苦しむ我々を尻目に、彼は中央大学に行くことがすでに決まり、毎日一

人でトレーニングをしていた姿を思い出します。鍛え抜かれた大きな体躯でウエイトをスマートに持ち上げ、力強く躍動感にあふれる姿はとてもかっこよく、その数年後に幻のモスクワオリンピックの全日本チームの選手となる素地を感じるほどに印象的でした。ヨーチンを塗ったあの手は、掌の皮も分厚くなり、手の甲はより褐色になっていました。
多感な高校時代を含めたその後の人生で、一緒に漕艇の世界を過ごした仲間として、彼のオアズマンとしての姿は私の憧れであり、誇りでもありました。
　謹んでご冥福をお祈りいたします。

いちばん遠いスポーツ

東弥生町あきちゃんズ　　久保田　典良

　レガッタはきつい、辛い、何が楽しいのか分からないので、絶対しないスポーツでした。それを結びつけてくれたのが、熊崎さんでした。東弥生町の青壮年会の席で、町民レガッタに出場という提案があり、お酒の勢いもあり、優勝して全国大会に行こうと盛り上がりました。練習も頑張りました。大会当日、自信があり決勝までは楽勝の予定でしたが大惨敗で勝負になりませんでした。悔しくて夜はねむれず、次の日から練習を始めました。その後2年間は決勝に進めず、3年目でやっと優勝出来ました。
今度はもっと上の全国大会に挑戦しました。サポートしてもらっていた岩波さんが加入し全国大会用の練習が始まりました。エルゴメーターを漕いだあとは全員が床にぶっ倒れるほどの厳しい練習で、岩波さんは「若い頃を思い出した」と微笑んでいました。
環境の違う漕艇場での初出場に緊張した全国大会でした。結果は1秒差で3位でした。問題点は、スタートが遅いのでこれを克服すれば優勝できる、と確信しました。翌年はスタートに重点を置いて練習し、優勝することが出来ました。関係する方々との出逢いや協力がなければ夢を掴むことは出来ませんでした。感謝しております。何処かに変なスイッチがあり、今でもどっぷりはまっています。

第29回下諏訪レガッタで

常に気遣ってくれた熊崎さん、丁寧にとことん指導してくれた岩波さん。同じクルーで苦しい練習に明け暮れたあの頃が走馬灯のように巡ります。
お二人のご冥福をお祈りいたします。

岩波健児さんを偲んで

チーム波健　　矢崎　順子

エイトで漕ぎ出す岩波さん（手前、整調）と熊崎さん（後ろ、7番）

諏訪湖には、岩波健児さんに教えを受けた多くの「ボート選手」がいるが、その中でもチーム名に「岩波健児」の名前を使わせてもらったのは私たちだけではないだろうか。

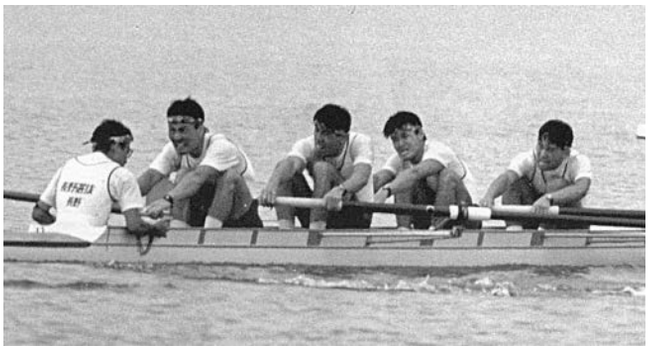
「チーム岩健」「チーム波児」「チーム波健」3つの女子クルー。ボートに全く縁のなかった私たちが、下諏訪レガッタの表彰台の常連チームに成長できたのは、ボートの楽しさだけでなく、強くなるための方法を岩波さんから本気で叩き込まれたからだと、自負している。

そんな本気の岩波さんとの最高の思い出、ベストレースは、2012年の全国市町村交流レガッタ豊岡大会。下諏訪レガッタ優勝を実現したチーム岩健が、全国優勝を果たしたレースだ。岩波さんにコックスをお願いし、後にも先にも唯一一緒に乗艇したレースだった。

第21回全国市町村交流レガッタ豊岡大会で優勝したチーム岩健

コックスを務めるということで、減量目標を立て、体重を減らして本番に臨む本気ぶり。
決勝レースは、「スタートで飛び出して、高いピッチで漕ぎ切る」と指示された。やるしかない、というか岩波さんが言うならやれる気がした。雨模様の円山川城崎漕艇場、諏訪湖のカリスマは、ひたすら私たちに「がんばれー!」と叫び続けた。私たちは頑張った。

私たちを本気で育て、ボートのある人生をくれた岩波さんには感謝しかない。
「ありがとう」。
ご冥福をお祈りします。



平成４年山形国体にて（県ボート協会刊『一艇ありて一人なし』から）